O-ネット通信

Association for Long Term Care Ombudsman Initiatives

第131号

2025/09/19

発　行

特定非営利活動法人

介護保険市民オンブズマン機構大阪

〒530-0041 大阪市北区天神橋3-9-27 PLP会館3F

TEL.06-6949-8192

FAX.06-6949-9296

E-mail:o-netnpo@train.ocn.ne.jp

URL:https://o-netnpo.site/

グループワークで熱心に話し合う受講者の皆さん

22人の外国人職員が参加

“やさしい日本語”で学ぶ 認知症ケア研修を開催

介護現場で働く外国の人々を対象に、7月17日（木）、認知症ケアについて1日研修を開催しました（助成：中央共同募金会）。13施設から22人の外国人職員が参加。連絡先を交換するなど、最後は和気あいあいとした雰囲気で研修を終えました。

司会の説明文から、講師の講義内容、受講アンケートに至るまで、「やさしい日本語」にするために日本語教師や外国人職員の助言を受けて臨んだ初研修。講義資料は理解しやすいようにイラストをたくさん盛り込み、配布物にはすべてルビを打つなど、細かな配慮を行いました。

◆認知症の人も“心”は豊かに残っている

「日本では、認知症のことを昔は何と呼んでいたか、知っていますか」

講師・松原宏樹さん（大阪市認知症介護指導者）のこんな問いかけから始まった講義Ⅰ「認知症になって困ることについて考える」。

「痴呆」が「認知症」になった背景、認知症の原因となる病気、認知機能が下がるとはどういうことか、認知症になるとどんなことに困るのかなど、認知症について知っておきたい事柄を、分かりやすい言葉で、ゆっくりと説明。「認知症になると、生活上できないことが増え、困ることもたくさん出てくる。でも一方で、できることもたくさんある。また、喜怒哀楽の感情も豊かに残っている。そこをしっかり理解して利用者さんと接してください」

講義Ⅱ「認知症の人が体験している世界を知る」では、トイレに行きたいけれど場所や方法が分からず、戸惑っている人のビデオを皆で視聴。「記憶したり想像したりすることが難しい」「場所が分からない」などが要因となって、認知症の人はパニックになることもありますが、そうした心の状態を知り、寄り添うことの大切さを松原さんは伝えました。

◆関心を持つ・聴く・考える を忘れずに

講義Ⅲ「より良いケアパートナーとしてできることを考える」は、山内恵美さん（大阪市認知症介護指導者）がグループワークを通して講義を進めました。

ワークは、初対面の受講者同士がペアとなり、相手が食べたいメニューを聴き取るとともに、その理由を尋ねるというものでした。

「このワークをしている時、皆さんは相手のことを知ろうと一生懸命になったと思います。認知症の利用者に対しても、〈関心を持つ〉〈気持ちを知るために聴く〉〈気持ちを理解するために考える〉。これらをあきらめてしまわないで、やり続けてほしい」と山内さん。認知症の人が感じている不安や寂しさに寄り添い、「あなたのことを大切に思っていますよ」というメッセージを、声や笑顔やしぐさで常に伝えてほしいと話しました。

講義Ⅳは「明日からできることを考える」。今日の講義やワークを通しての学びを、どのように自らのケアにつなげていくのかについて、グループごとに各人が思いを述べ合いました。

国籍も異なる人々だけに、話し合いの場の共通言語は「日本語」。日本語で意見を述べたり、笑ったりと、楽しさが溢れました。

「施設の会議では、黙って他の人の意見を聞いていることが多い外国人職員さんですが、こんなに皆さん、おしゃべりできるのかと驚きました」と話すのは研修委員を務める福留千佳さん。介護現場を支える外国人職員の方々のパワーをしっかりと感じた1日でした。

総勢38人が一堂に会し 顔合わせ

第25期オンブズマン認証式

第25期活動（今年10月～来年9月まで）に備え、9月13日（土）、オンブズマン認証式をPLP会館小会議室で開きました。3期生から26期生まで総勢38人が委嘱状を受け取り、担当施設の確認やパートナーとの顔合わせ・打ち合わせを行いました。

25期活動に臨むオンブズマンのうち、10年以上活動経験のある人は9人。一方、新人の26期生は11人、活動経験1年の25期生は9人と、活動経験の浅い人が半数以上を占めるようになっています。

また、介護職や医療職経験者の他、行政書士や研究者など、自身の仕事の幅や視野を広げるために活動する人も少なくありません。それだけ介護の関連領域が広がっているためだと思われます。

認証式では、10年以上活動を続けている坪内尚子さん（15期生）に感謝状を手交。また、9月の活動を最後にオンブズマンを引退する田中美智子さん（1期生）にも感謝状と花束を贈り、長年の労をねぎらいました。

田中さんは20年以上にわたり活動に従事。コロナ禍の間もオンラインで利用者や施設担当者と面談するなど、積極的に活動に携わってくださいました。

25期活動は10月からスタート。新しいパートナーとの活動が始まります。

引退にあたって

田中 美智子（91歳）

昭和1桁生まれの女性ゆえに、自分らしい生き方の選択が難しい時代に、常時矛盾を感じながら成長しました。故に、大阪ボランティア協会で異なる立場を対等につなぐボランティアコーディネーターという仕事を天職と感じ研鑽したものです。

その経験を活かし、機構の理念と役割に共感！即、参加を決めました。当初は施設間で運営理念・職員の力量などに差を感じることもありました。20余年の今、その懸念はほぼなくなり、老後の安心を委ねられる施設が多くなったことを実感し、安堵しております。

介護職員研修

パーソン・センタード・ケアで各自の対応見つめ直す

7月31日（木）、「改めてパーソン・センタード・ケアを考える」をテーマに介護職員研修を実施しました（助成：日本社会福祉弘済会）。日本におけるパーソン・センタード・ケアの第一人者である水野裕・まつかげシニアホスピタル院長を講師に、認知症の方への対応を見つめ直す機会を持ちました。講義の他、3施設（ふれ愛の館しおん・こうのとり・きずな）の実践発表や、受講者同士の話し合いの場も設定。受講者は施設職員など37人でした。講義の要約は次のとおり。

「体験に基づく理屈や有用性が理解できないと、ケアの継承は難しい」と話す水野さん

きずな（小規模多機能型）の実践発表では利用者も登壇

●考えることを諦めない

コロナ禍以降、介護現場では職員の確保難が一段と進んでいます。ただし人員が多ければ「質の良いケアができるのか」というと必ずしもそうとは言えません。

確かに目は届くかもしれませんが、利用者の想いを分かろうとする気持ちが職員になければ、かえって利用者の行動を抑える要因になってしまう恐れもある。

自分の行動につきっきりの職員がいたら、うっとおしくて仕方がない。それで怒ったり暴言・暴力が出たりすることもあるのです。

一方、自由にしてもらうことで、転倒や骨折などが起きる恐れはある。ただ、「どんなことに関心があるのか」「どこまでできるのか」「何がしたいのか」などを、観察し判断・評価して足りないところを援助するのであれば、それは「放置」でなく「技量」といえるでしょう。

「認知症が進行したから」「重度の認知症だから」と決めつけるのは簡単です。

でも、介護という仕事は単純作業ではありません。「この人は何がしたいのだろうか」ということを考え続けないと、職員の想像力や観察力はストップしてしまいます。

結局のところ、認知症の方に自由にしてもらうか否かは、個々の介護現場が持つ文化（職場風土）と現場責任者の考え方に左右されると思うのです。

●些細なことを軽視しない

利用者のBPSD（認知症の周辺症状）の対応に疲弊し、介護現場から入院や薬の投与を求められることもありますが、ここで大切なのは「利用者との日ごろの関わり合い」。「どう収めるか」ではなく、普段からの交流と信頼関係の構築がものを言います。

また、利用者の身体状況の些細な変化を軽視しないことも大事です。例えば、指にひび割れがある場合、それを手当てをせずに精神安定剤の服用を求めるのは本末転倒。便秘や洗髪してもらっていないなどがBPSDの引き金になることも少なくありません。

いずれにせよ、必要なことは「利用者の行動をしっかり見る」「本人に聞く（何かのヒントにはなるかもしれない）」「自分たちが利用者の想いを分かっているのかを考え続けること」。そこにこそ、よりよい認知症ケアのカギがあるのではないでしょうか。

2025年度 定時総会を開催

6月7日（土）、第26回定時総会をドーンセンターで開催しました。出席者は27名（運営会員27名のうち会場14名、委任状13名）。第1号議案（24年度事業報告）、第2号議案（同決算報告）が承認され、25年度事業計画および事業予算の報告が行われました。

第1号議案は堀川世津子事務局長が24年度の事業を総括。第2号議案では水上義博副代表理事が「オンブズマン活動や外部評価、助成金の増加などで100万円余の黒字で、5年連続の黒字決算となった」と報告しました。荒木康弘監事の監査報告の後、両議案は異議なく承認されました。

第3号議案の役員選任は、2年間の任期となる新任2名を含む理事11名と監事2名が紹介され、同議案も拍手で承認されました。

報告事項では、25年度事業計画を堀川事務局長が担当。年度後半から予定されている豊中市介護保険事業者連絡会との連携事業についても説明されました。

事業予算は「収入1300万円・支出1500万円を見込んでいる」と水上副代表理事が報告し、全議事を終えました。

運営会員の出席者数を発表し、総会成立を伝える淺野幸子理事

役員（任期：2025年6月7日～2027年度総会終結時）
〈理事〉阿久津義徳・清水弥生（以上、新任）、淺野幸子、秦康宏（副代表）、藤谷忠昭、藤本委扶子、寳楽陸寛、堀川世津子、三木秀夫（代表）、水上義博、山田裕子（副代表）
〈監事〉荒木康弘、那須良太

第68回Oーネットセミナー
地域生活をサポートする橋渡し支援モデルに期待

総会終了後、第68回Oーネットセミナーがあり、秦康宏・大阪大谷大学教授が講演しました。参加者はオンライン含め46人でした。

最初に秦さんは、最近の外国人介護人材の受入れ状況を概括し、「介護施設で見れば、外国人材の受入れはもはや珍しくない」とコメント。その上で、Oーネットの報告書『外国人介護職員の受入れと課題』の調査結果にも言及しました。

同報告書の調査では「職場環境」の項目でキャリアパスの明示について尋ねています。実施率は高かったものの、「これを外国人材にも子育て期を含めた長期的スパンで示せているのか、今後注視していく必要がある」と指摘。また支援体制については「音声による介護記録や多言語ソフトの活用と普及が今後期待される」と述べました。

「受入れの課題」の項目では、施設から「金銭的負担の軽減」を求める意見が目立ちました。

「現状では生活支援費を施設が補助している。そこで私案だが、個人ではなく複数人連帯で貸し付ける〈マイクロクレジット制度〉を活用してはどうか。入国時、帰省、介護福祉士受験のための費用などに充当できます」

ともあれ、外国人材を受入れるということは、地域住民として受入れるということでもあります。「災害時、一緒に過ごす人たちでもあり、住宅、医療、日本語習得、子育てなどができる環境整備が不可欠だ。Oーネットの応援隊を含め、地域生活をサポートする橋渡し支援モデルの構築で、地域共生社会の実現が可能になるのではないだろうか」と結びました。

カレンダー

2025年10月～2026年1月

10/24(金)	理事会
11/14(金)	豊中市介護職員研修
12/6(土)	応援隊ミーティング
12/7(日)	豊中市応援隊養成講座 1日目
12/13(土)	同 2日目
12/20(土)	同 3日目
12/29(月)	事務局冬季休暇（～1月7日）
1/13(火)	豊中市応援隊養成講座 受講者面談
1/15(木)	同
1/16(金)	同
1/24(土)	オンブズマン研修会

ご寄付いただきました

大野富子・緒方しのぶ・石立隆貴・木下洋子・後藤田慶子・小林加代子・小林弘法・坂元明子・篠崎敦子・瀬能邦子・竹本時子・田邉秋子・豊島久美子・寺本正紀・ドブソン栄子・中下吟子・那須良太・西澤悦子・坂東美子・松島嘉津子・山下景子（以上、敬称略）